

刀、戦、僧侶、仏教の鎌倉時代

こうやって国語についてメッセージを書いてみると、授業をやっているようで、楽しくなってきました。校長は授業ができませんので、昔を思い出してどんどん書きますね。

今回は二年生です。これまで「枕草子」と「竹取物語」について書きました。どちらも平安時代に作られました。時代が一つ違うだけで作られる作品ががらっと変わります。平成から令和に変わっても、私たちの文化は劇的には変わらないんだけどね。平安と鎌倉では全く違います。これが「時代を映す鏡」という理由だね。

鎌倉時代はこうやって覚えておくといいよ。「鎌倉」は地名だけど、鎌が入っているね。鎌は刃物だよ。つまり、鎌倉時代は刃物に象徴される時代だということですよ。

「切るもの」があれば、「切られる」ものがある。命のないものを切るならいいけど、命あるもの、とりわけ、人間が「切られるもの」になってしまふとたまったものじゃないよね。

「人間を切る刃物」をもつ人々がこの時代に力を出しました。そうです、刀という武器をもった武士です。武器をもてば人々は戦います。だから、鎌倉時代は戦（いくさ）が多くなるよね。戦が多くなれば人が傷ついたり死んだりします。平和で安全だった世の中が、物騒な血なまぐさい世の中になっていきます。鎌倉時代はそういう時代でした。世の中が不安定になると、人々の生活も不安定になります。「何とか落ち着いてほしいなあ」「戦なんてこりりだ」……そう思ったかどうかは私の推測ですが、当時の人たちは世の中が落ち着くことを願い、救いを求めました。それが宗教です。とりわけ、仏教に当時の人たちは心を寄せるようになります。仏教と言えば僧侶ですよ。つまり、お坊さんです。鎌倉時代は、僧侶が力を出すことになりました。百人一首の中の鎌倉時代の歌の絵札には、僧侶が多くなくなってくでしょ。作られた短歌、物語、随筆などにも、仏教の影響が強く出ています。

仏教の教えは、ひとことと言うと「同じ状態が続くことはない」ということです。それを意識して「平家物語」を読むと、鎌倉時代のことがよくわかりますよ。



(五月二日の分)

